

沖縄のお墓に関する考察

12992019 石谷 繭子

立木 茂雄教授

序論

2001 年夏の沖縄訪問時に沖縄のお墓に衝撃を受け、すっかり魅了された私は、多様なお墓の形に疑問をもった。私が特に魅了されたのは亀甲墓であるが、現在の沖縄では家形のお墓が圧倒的多数であった。そこで、時代によってお墓の形は変遷し、主流は変化しているのかを卒業論文のテーマにしようとしたのだが、2002 年夏沖縄を再訪した時、私はお墓の数の多さに圧倒された。今のお墓の主流が家形であることは、一目でわかった。しかし、このお墓の数はどういうことだろうか、なぜこんなにも新しいお墓がたくさんあるのだろうか、という疑問がわいてきた。実際現地の方も最近お墓が増加していると言う。

しかし、沖縄のお墓の研究者、風水の研究者はいるが、お墓の形の変遷がなぜ起きているのか、なぜ沖縄のお墓は増加しているのかといった生活に近い社会学の視点で研究している研究者はいなかった。そこで、沖縄におけるお墓の歴史的なあり方、それを取り巻く環境の変遷を追い、現在のお墓の形、数の増加が何に関係しているのかを、私の考えるいくつかの仮説をもとに検証していく。これによって、沖縄におけるお墓のあり方を理解するものになればと考える。

1, 1 沖縄の風水

窪徳忠先生沖縄調査二十年記念論文集刊行委員会(1988)によれば、自然環境を評価し、環境と人間との相関関係から人間の命運を鑑定する風水が中国において体系化されたのは、三世紀頃とされる。その後東アジアに広がり、各地で受容され、独自に発展している。

日本(本土)への風水知識の伝来は六世紀頃とされる。風水には陰宅風水(墓相)と陽宅風水(家相など)があるが、日本(本土)では墓相よりもむしろ家相の知識が重要視されている。日本(本土)では誰々の祖先の父系子孫であることより重要なのは、現在住まう家屋敷を象徴とした家系である。したがって重要なのは直系祖先の墓を判断する墓相ではなく、家屋敷を判断する家相だというわけである。そのため、屋敷や家屋の設置に関しては、しばしば風水師の指導するところとなる。相談を求める者があれば、彼は求めに応じて敷地を選定し建設の日取りを選ぶ。

沖縄への伝来は十七世紀頃とされている。中国からの留学生によってもたらされた風水知識は、はじめは唐栄士族が、後には民間識者たちが沖縄各地に普及させ、今日あるような人々の生活知識の奥義となるに至った。沖縄の諺に「自分にこそ風水はある」(風水の吉凶判断のように、この世の生き方の良し悪しは、自分の心の中にこそ委ねられている)と

いうのがあるが、まさに沖縄の人々にとって風水知識は、自分の人生判断の高度な知識の代名詞ともなっている。沖縄人の精神をも形成した風水知識は、王城風水・村落風水・墓地風水・植樹風水、そして家屋・屋敷の風水など広汎な応用分野に及んできた。それら風水知識の応用範囲は、ほぼ中国の風水説に匹敵しているだけでなく、また日本（本土）と同様に、沖縄独特の風水知識をも生み出してきた。今日、易者・巫女（ユタ）や大工などが風水師となり、墓地造営・家屋建築において風水判断をしている。

数ある風水の中から、ここでは沖縄の墳墓風水について記述する。本土を除いて西太平洋諸文化の風水説が重要視してきたのは、この墳墓風水であった。沖縄もまた墳墓風水が盛んなことは例外ではなく、かつまた独自の風水説を発達させて今日に及んでいる。墓地の風水が良ければ祖先からの恩恵は安定し、子孫の繁栄に直結していく。生なる世界は仮住まいであり、自分がやがては入居するついの棲家こそ永遠の住まいなのであり、墓はまた一族繁栄の象徴であった。墓もまた墓を造る人間の干支と日時・場所と方角とが、慎重に勘案されて造られるのは、家屋・屋敷の風水判断と同様である。ただし沖縄の墳墓風水が家相判断よりもより一層中国のそれに近似してみえるのは、墓の構造、それは亀甲墓においてであるが、それが中国のそれと同様、理想風水を具現化したものだからである。亀甲墓には納骨堂カーミナクー（竜脳）があり、扉ジョー（穴）があり、葬祭場ミナガ（明堂）があり、そして左右に塀囲い（分脈・意脈）がある。墓地もまた「西の御嶽」（イリヌウタキ）か「屋の上原」（ヤーヌウイバル）という土地に立地していて、子孫の住居を眼下に見おろす場所にあることが多いということである。

1, 2 沖縄のお墓の形と種類

このような風水の影響のもと、どのようなお墓がつくられていったのだろうか。平敷令治（1975）と名嘉真宜勝（1999）によれば、基本的に横穴式と平地式の2つに分けられる。

① 横穴式のお墓

洞穴墓：洞穴（ガマ）を利用した墓はふつうガマバガとよばれている。自然の洞穴を利用し、遺骨を丁重に安置している。中には長年経たせいか、無雑作に積まれているものもある。この洞穴墓は山中や海岸線に多く発見され、現在の集落のお墓としては忘れ去られたものが多い。そして、そのほとんどが大和人墓とか姥捨山の伝説と結びついている。洞穴墓の分布は広く沖縄全域にまたがっており、もっとも原初的墓制であったことを示している。近年、これらの洞穴墓を囲い込んでしまったという例も多い。

岩穴囲い込み墓：人口が増加して人々の往来が激しくなるにつれ、人々はその遺骸の惨憺たる光景に耐え切れず、また猪や野犬の害から守るために石垣を築くようになったのであろう。囲い込み墓は俗にチンマーサ（積み回し）とよばれ、これは単に周囲を一定の高さに積み上げたものと、岩穴を全部閉じてしまったものとに分けることができる。前者はチヂフキ墓（頂上開き墓）とよばれ、後者の全閉式への過渡期的役割を果たしている。一般に古い囲い込み式の墓は、1m 前後の高さにしか積み上げてなく、その遺構は現在でも無数に見ることができる。いっぽう、全閉式は現在でもその機能が十分に生かされ、使用されているものが少なくない。囲い込み墓は規模が非常に大きく、厨子甕でぎっしり埋めつくされているのがふつうである。

壁龕墓：崖の中腹につくられた掘り込み式のお墓である。この種のお墓はその伝承がきわめて少なく、謎につつまれた墓制のひとつである。洞穴内には甕の破片と骨がわずかに埋もれているだけで、供養の痕跡は何も残されていない。この形で共通していえることは、横穴の規模が小さく、しかも密集して発見されることである。しかし、その確かな年代や発生過程については明らかでない。

亀甲墓：屋根の部分が亀の甲の形をしているところからカーミヌクーバカとよばれている。墓をつくる方法は二通りあり、岩山に横穴を掘る方法と、石をアーチ状に組んで、その上に土砂をかぶせる方法がある。沖縄におけるもっとも古い亀甲墓は「伊江御殿家の墓」（那覇市首里石嶺）で、中国南部の影響を直接受けたものといわれている。亀甲墓は破風墓よりも後代に現れたもので、構造からいっても類似した点が多い。また、一般庶民に浸透するまでにはかなりの時間がかかっているが、これは首里王府時代、庶民に亀甲墓や破風墓をつくるのが許されていなかったためである。また、亀甲墓は俗に母体をかたどったものといわれ、人は死ぬと再び元のところへ戻ってくるという帰元思想の表れであるという。各部の名称にしても、人体の名称を使ったものが少なくない。このお墓の北限は伊平屋島までであり、与論島から北には見られない。南限は台湾・華南（福建省）方面までのび、さらに南まで分布すると推定されるが、今のところ明らかではない。

破風墓：破風墓は、王家の風習が後に一般庶民の生活の中に沈下して、今日のように広まったものである。初めの形式は今日流行中の家形墓と外観は同じで、異なる点は岩壁を背にして掘削した洞穴を有していることである。このお墓は沖縄本島に多く、大きいものは人の住めそうな家ほどの広さをしている。庶民が破風墓や亀甲墓をつくるのが許されるようになったのは、1879（明治 12）年廃藩置県後のことである。

平葺墓：平葺墓はヒラフチバーとよばれ、その構造は亀甲墓とよく似ている。亀甲墓との大きな相違点は、屋根が平板でマユが一直線であること、両脇に円いウーシがないことである。この種の墓の分布はほぼ亀甲墓の分布と一致し、一般的傾向として亀甲墓よりは広壮さにおいて劣るものとされている。それは亀甲墓よりも建造費が少ないという理由によるらしい。

掘り込み墓：砂礫岩層や粘板岩層に横穴を掘り、墓顔や袖をいろいろ自在に工夫、装飾した形式の墓で、俗にフィンチャーとよばれている。この形式は砂岩層の発達している北中城村渡口から沖縄市泡瀬一帯にかけて多く見られる。また、砂岩層への掘り込み墓はほぼ全島的に分布し、特に仮墓的色彩がつよく、費用ができるまでの臨時墓としてつくられているようである。掘り込み墓の特色は資材をまったく要しないことで、たんに墓口のフタのみに石材が用いられている。

② 平地式のお墓

ヌーヤ墓：ヌーヤは「野の家」の意味で、野原に周囲を石で積み上げ、屋根を茅で葺き、あたかも住居のように築いたものである。戦後もしばらくの間、八重山の竹富島や新城島には残っていた。

家形墓：平地に築造した家形の破風墓で、方言ではヤーグァバカとよばれている。かつての破風墓が岩壁を背にして墓室を形成したのに対し、家形墓はブロック造りになっている。これらの様式は戦後の火葬と合致したもので、こじんまりとしたものが多く、本源地は識名霊園（那覇市）にもとめることができそうである。近年つくられるお墓の多くがこの形式で、各地に普及している。

石積墓：石積墓はヌーヤ墓と同じく先島で顕著で、ヌーヤ墓の後に発生したものと思われる。しかし、直接ヌーヤから発生したものか、あるいは大陸の巨石墓移動の流れをくむものであるかは断定できない。

塔式墓：塔式墓は日清、日露戦争による戦没者や特別弔葬による勲功碑墓に由来する。方形の箱形の上に碑を建てたもので、近年わずかながらその建造が見られ、今後の流行が注目されている。

箱形墓：箱形墓はコンクリート・ブロック造りのお墓で、幼児墓や仮墓として利用されている。戦後の火葬の普及とともに、埋葬式のこれまでの幼児墓に取ってかわってきた。

家形墓の項目に、戦後の火葬でという記述があるが、それについてここで付け加えてお

く、沖縄では戦前まで風葬が主流であった。名嘉真宜勝（1999）によると、沖縄では人が亡くなると棺を適当な空き地、もしくはお墓の中におき、その後肉体が朽ちた 1 年から 7 年の間に洗骨儀式が行なわれていた。遺骨を棺から出し、海水で洗い清めるのである。洗い終わった遺骨は厨子甕におさめてお墓の奥深くに安置するが、門中墓では墓内が狭くなるため、そのままバラで合葬するところも少なくないという。これは沖縄と奄美に見られる風習であったが、戦後沖縄本島で火葬が普及すると洗骨は見られなくなった。しかし、周辺離島では依然として行なわれているという。

1, 3 お墓の所有形態

上記のように、沖縄のお墓にはさまざまな形や種類があり、その所有形態もいくつかある。名嘉真宜勝（1999）によれば、4 つにわけられる。

村墓：村落共同体でお墓を所有している形態で、地縁共同組織の発達している集落に維持されている墓制である。しかし、今では村墓はあっても利用されず、神墓として清明祭（旧暦の 3 月に行われる先祖供養）に拝まれることが多い。

模合墓：友人や知人など気の合った者同士が経費を出し合ってつくったお墓で、寄合墓ともよばれている。沖縄社会では金銭の相互融資機構である模合がさかんである。模合墓は、集落の範囲での模合が旺盛であった明治時代につくられたものが多く、それまでの村墓からぬけ出て、気の合った者同士で広大な亀甲墓や破風墓を築いた。この模合墓は沖縄本島南部や八重山地方では発達しなかった。

門中墓：門中とよばれる父系親族集団で所有している共同墓のことである。もっとも一口に門中墓といっても、集落の父系親族集団が一体となって 1 つの墓を共有する形態から、これらの親族集団から枝分かれした兄弟がつくった小規模集団共有の墓、いわゆる兄弟墓とよばれる形態のものまである。門中墓は沖縄本島南部に比較的多く分布した墓として知られている。詳しくは後の章で述べる。

家族墓：家族単位で所有し、その成員だけを葬るお墓で、代々長男によって継承される。首里・那覇では首里王府時代から採用されていた。明治・大正期にかけて各地で普及したが、沖縄本島南部は今でも門中墓が多く、家族墓が採用されていない地域といえる。

1, 4 現地調査の結果

沖縄にはいたる所に墓地があり規模も大小様々であるため、地元の人でなければ墓地の場所もわからない。そこで、読谷村立歴史民俗資料館館長の名嘉真宜勝氏にお話を伺った際、沖縄には公営の墓地があるということを教えていただき、浦添市、北谷町、嘉手納町役場に行って墓地の場所を教えてもらった。教えられた 4 ヶ所の墓地に行き、その中でも比較できる規模の墓地を 2 つ選んで公営の墓地におけるお墓の数、形、材質を調査した。これらの公営墓地は、米軍や公共工事の用地買収のため立ち退いた人々が優先的に利用できるということだ。

嘉手納町営墓地：15 年ほど前に造成

墓総数 65

家形墓 61 材質：石 8 コンクリート 53

亀甲墓 3 コンクリート 3

箱型墓 1 コンクリート 1

浦添南第一墓地：5 年ほど前に造成、現在もお墓を建設中。55 基で最大

墓総数 31

家形墓 30 材質：石 20 コンクリート 10

塔型墓 1 石 1

調査結果を見ても家形のお墓が圧倒的に多い。上記の 2 ヶ所以外の墓地でもコンクリート製の家形墓が非常に多かった。

1, 5 調査結果からの考察

私が見てきた沖縄中部は特にそうであるが、海沿いは開発が著しい。国道 58 号線は海沿いを南北に貫く道路である。付近には米軍施設だけでなく、大型店や若者に人気のアメリカン・ビレッジが立ち並ぶ。海沿いの物件は沖縄でも人気で、高値にもかかわらず米軍人たちが入居するということで、私が滞在したホテルの付近はマンションや一戸建て住宅の建設がさかんに行われていた。これらの開発によって海沿いにあったお墓が立ち退いたことも十分に考えられる。前述の名嘉真氏によると、以前読谷村でホテルの開発が行われた

時、付近にあった 100 ほどの墓地はすべて、ホテル側が提供した土地に移ったということである。

家形墓が現在建つお墓の主流であることは間違いない。現世で住んでいる家がコンクリート製であるため、コンクリート製家形墓を受容しやすいのではないかと（名嘉真 2002），という説もあるが、なぜ家形かという疑問に対する明確な答えはない。

しかし、家形が土地不足と関係しているのは否定できないであろう。まず、現在の墓地は、一つでも多くのお墓を収容するためであろうが、一基あたりの面積が小さい。公営の墓地は特にそうである。その小さい範囲でお墓を建てるには、以前のような背後にある岩壁を削って、という手法は使えない。新しい墓地は山を切り開いてはいるが、平地式のお墓に適するように造成されている。そのため、亀甲墓のような大きなお墓を建てるのが難しくなってくる。北谷町にある崎原石材の方のお話では、亀甲墓はやはり大きくないと見栄えがしないそうだ。よって、小さな敷地に亀甲墓を立てることはあまりないそうである。実際にいくつかの墓地を見てまわったが、小さな亀甲墓はほとんど見かけなかった。

そして、コンクリート製ということに関しては、経済的な背景が要因として挙げられる。コンクリート製のお墓は石製のものよりも安価である。

家形受容が先か、土地不足によって家形が受容されていったのか、明確な答えはない。しかし、両者が密接に関係して現在の状況にいたっているのだと考えられる。墓地にはこの状況を反映してか“墓工事格安 生コンオール流し込み 6坪 120万円”や“天然高級御影石 期間限定 100万円”といった、石材会社の張り紙が墓地のフェンスに必ずといっていいほどあった。今では家形が主流であり、その中で価格競争が行なわれている。

このお墓の増加、土地不足は本土と同じように、核家族化による家族墓の増加によるものではないかと考えた。祖先崇拝を大切にする沖縄では、お墓に何千万円もかけるのは珍しい話ではなかった。門中墓なら、皆がお金を出し合ってお墓の建設、管理が行われていた。そのため、大きなお墓も建てることができたのだ。そこで、門中の解体がお墓の増加に関係しているのではないかと考え、以下で検証していく。

2, 1 沖縄の門中, その発生過程

門中とは沖縄における父系出自集団のことであるが、これは研究者の間でも見解が統一されていないため、説明が非常に難しい概念である。そこで、まず門中の発生からを歴史的に見ていく。

新崎盛暉、大橋薫（1989）によれば、沖縄では 1689 年に王府は士族に対して「家譜」、あるいは「系図」の提出を命じ、そうした家譜をもつ「家」を士族、そうでない「家」を百姓（農民）とした。歴史的にはそれ以前から士族・百姓の区別は存在していたが、家譜作成以前は同じ士族でも家格があいまいであったり、士族身分の相続についてもあいまいであったと思われるが、家譜作成後はそうした点が明確になっていったと考えられる。

士族で門中というとき、この家譜を同じくする者たちが同じ門中ということになる。沖縄の士族は、中国名（唐名・カラナー）と大和名（ヤマトナー）と童名（ワラビナー）の 3 つの姓名をもつ。このとき、一門が同じであるのは唐名の姓と、大和名の名前の一字を同じくする点である。たとえば、王族からの支流にあたる一族は「向氏」とよばれ、唐名は向象賢のように「向」を姓とする。大和名は羽地朝秀の朝の一字を名乗り頭と称して、一門は大和名に必ず朝の一字をつけるのである。こうして 18 世紀にかけて、士族は家譜を中心に門中としてまとまりを見せるとともに、今日見られる清明祭のような祭りや、トートーメー（位牌）などの習慣が始まっていったといわれる。現在首里最大の門中の 1 つである毛氏一門は、その数 20 万人ともいう。

一方で、農民たちもそうした士族にならって「門中化」の動向が 19 世紀から今日にかけて見られる。農民の間にも、本来の血縁、地縁関係の中に門中化が図られたのである。

仲松弥秀（1993）によれば、古代村落には単に村共同体としての葬所のみがあり、その祭祀も神事としてその共同体の立場から行なわれてきた。それが、おそらく首里・那覇において特権階級の墓が発生した以後であろうが、田舎においても墓が設けられるようになった。

村の墓は村の大小や事情によっていくつか組をつくり、組の有力者を中心として組墓がつくられていった。この墓をムエーバカ（模合墓）あるいはズリバカ（寄墓）、ユレーバカ（寄合墓）といった。組は必ずしも親類だけで構成されたとはいえない。村によって異なるが、地域区分にしたところ、あるいは某実力者中心としたその親類、知人による区分の仕方もとられた。いずれの区分法にしても、その組別に 1 つの墓を使用するようになる。そのような集団共有墓に所属した人々がハラ、ヒキ（門中という名称以前の集団名称）と

いわれるものになったと考えられる。このような組墓の祭祀は墓をつくる際の中心人物が主管するようになってきたのであるが、年が経るにつれていつしか先祖を同じくしている集団の観念が生じ、そして祭祀中心人物の家がこの集団のモトヤー（本家）となってくる。この本家なるものの多くは、その村の神事に関する家柄であった者で、同時に政治的にも経済的にも中心的な役割を兼ね備えるようになった者が多かったこと、また村落共同体は各人が親類といえはいえたことから、本家といっても特に支障がない関係ではある。

ハラ、ヒキ集団も時代の経過につれて大集団化してくる。それにつれて墓は狭小化してきて、とうてい 1 つの墓では収容しきれなくなる。この状態になって、より大きい墓を築造する力のある集団はともかくとして、多くの場合は近い親類同士か、親しい知人同士が組をつくって分離墓をつくるようになる。かくして新墓が形成された際には、前の先祖の墓は按司墓、または神墓とよばれるようになる。そして、このハラ、ヒキの按司墓から分離した墓集団が、数代経った今日においては婚姻、養子縁組の過程を経て門中というものになっている。そして墓門中の本家と称されるものも、今では実質上の血縁の本家とほとんど一致するようになっているという。

2, 2 門中の構造

門中内の決め事さえ沖縄の中でも地域差があるため、一概に 1 つの論にまとめることはできない。よってここでは渡邊欣雄（1985）の説を参考としたい。

沖縄の出自集団である門中は、「家」や家族を基本単位としていて、出自集団の分節化はその基本単位の分裂、新単位の生成という形で行なわれる。生家は年長者と男性という基準により長男が居残って指導権を継承し、女子は婚出する。基本単位に男子後継者がいない場合は同じ出自集団内から養子を取り、婚出した女子は帰属の多様性があるが、原則として自分の子供には自分の成員権を伝達できない。これが沖縄における出自集団の基本原則であり、成員権の資格は出生によるのである。

これをわかりやすく説明すると、ある門中の本家の長男には男子が生まれなかった。その場合は次男の長男を本家の長男として迎え、跡継ぎにする。次男以下はわずかに財産を分け与えられ、分家していく。相続継承の具体例はこのように行なわれる。『実際の相続はおおむね、父の年齢が 60～70 才の時に行われるといわれ、一般的には父の所有していた財産（主に耕地、屋敷地、家屋、墓、位牌など）を一括して相続し、かつ、門中の本家の場合、門中内の特定の地位を継承する。・・・長男が相続した場合、各家の財産所有高によっ

て事情は異なるが、次三男以下は大抵その耕地を生家から分与され、分家する。分家への分与財産は、一般的には耕地若干で、他の生活過程に必要とする財物の多くは、出稼ぎその他によって独力で蓄財することが期待されている』（渡邊 1985: 125）と渡邊は大胡（1965）の言葉を引用している。このように、現在の沖縄社会では父系長男に「家」を相続させることが制度的になっているが、仲松弥秀（1993）によれば、男児のいない場合の家督相続は父系男子のみとは決まっていなかったことを、現在でも田舎の古老は知っているという。気に入りの男児、その多くは双系的親類の子であったが、それもそうあるべきだということからではなく、付き合い上よく知っていたことから養子、婿養子にしたという。もしそこに気に入りの下男がいた場合はその子にさえ相続させたということである。このようなことは、首里・那覇の士族階級でも遠い過去においては同様であったが、17世紀前半頃いち早く父系男子系統になった。

女性の場合は地域や立場（ユタや巫女などの霊能者）によって異なるが、多くの場合女性には財産相続がなく、婚出先の夫のお墓に入ることになる。だが、門中としての行事がある際には、実家に参加する。つまり、自分の子供は結婚した男性の門中としての成員権が与えられるが、女性の実家の門中の成員にはなれないということである。女性は位牌や、宅地などの財産を相続することができないが、それが社会問題に発展することがあった。新崎盛暉、大橋薫（1989）によれば、一例は、祭祀相続の争いが親戚間で生じ、その際一族の男系親戚が沖縄の慣習に基づきトートーメー継承（財産もともなう）を主張したため、直接の娘にあたる女性は納得せず、那覇家裁に審判の申し立てをした。1981年3月、同裁判所はトートーメー継承の慣習は、男女の平等を規定した憲法およびその他の法令に違反する、として申し立て人を継承者とする旨の審判を下した。同審判には、“トートーメーは女でも継げるか否か”の論議が背景にあり、裁判所の法律的な判断が注目されていたという。

だが、これは一部のようなものである。会員数100人を超す奈良沖縄県人会の事務局でもある、沖縄料理屋「喜納」の女将さんの喜納静子さんは、沖縄にトートーメー議論はあるが今ひとつ盛り上がりには欠け、社会を変革するような動きにはなっていないという。

さて、ここまで沖縄特有の門中の形態を見てきた。この門中がお墓の増加に関係しているのかを次で検証する。

2, 3 門中とお墓の増加の関係

かつて私は核家族化が沖縄でも進み、それがお墓の増加に関係していると考えていた。

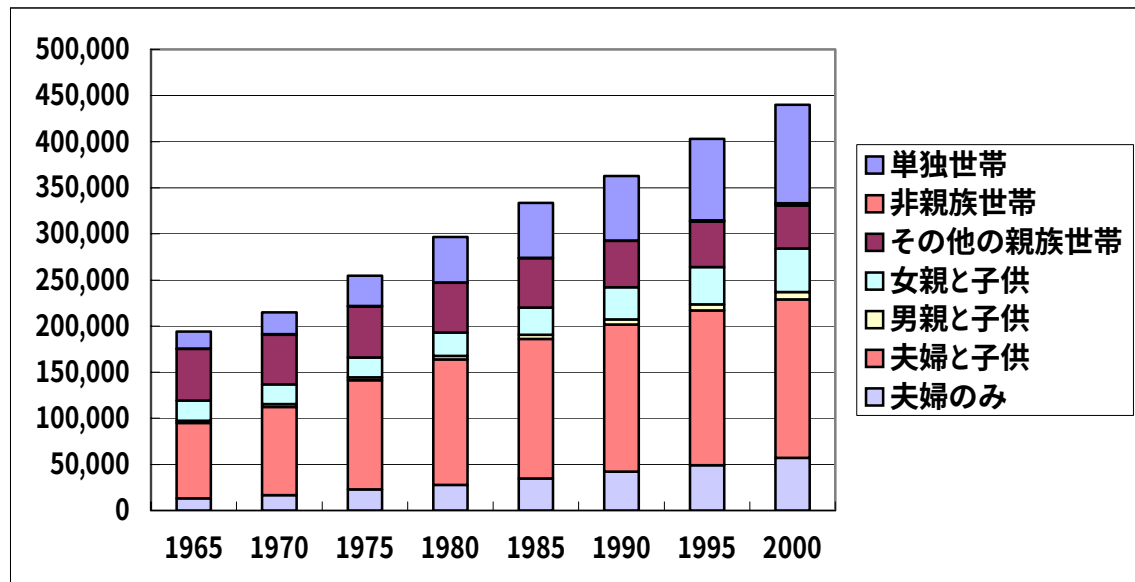


図1 沖縄における世帯の家族類型の推移

出展：国勢調査（1965～2000）をもとに作成

上記の家族類型の推移からも近年、夫婦のみ、夫婦と子供、片親と子供といった核家族世帯が増加傾向にある。

だが、門中制を調べてとらえなおした時、核家族化と門中の解体、お墓の増加は結びつかないことに気がついた。私は今まで沖縄の門中墓を、本土のかつてのお墓のようにとらえていたのである。本土のお墓の場合は長男の両親と同居し、お墓も長男夫婦はその両親のお墓に入るのが普通であった。それが、核家族化が進み、実家を離れて生活する家族は田舎のお墓には入らず、身近な場所に墓地を買い求める傾向がでてきている。それが現在のお墓の増加の大きな要因の1つだと私は考える。

だが、沖縄の門中墓は最初から違った。たとえ両親、長男夫婦、その他の親族と同居していたとしても、両親のお墓に入るのは長男夫婦だけである。上記の図1からも、親族世帯は減少しているが、それは同居が減少しているだけであり、その他の兄弟は自分でお墓を建てなければいけない。つまり、条件は昔も今も変わらないということである。

ではその門中が解体して、長男夫婦の家族墓が増加しているのか。門中墓、家族墓で区分されたお墓の増加を示す資料はないため、それを証明することはできない。今も門中制は続いている、と奈良沖縄県人会の喜納さんは言う。門中の長男であり、本土で仕事をし

ている方の話を聞かせて下さった。その男性の妻は本土出身で、夫婦の子供も本土で生まれている。妻と子供は沖縄には移りたがらず、男性もこちらでの仕事が上手くいっているため、沖縄に戻る気はない。沖縄では、長男の代わりに他の親類が門中の長男の仕事をしてきている。彼の母親は、生きている内は帰って来なくてもいい（こちらで住まなくてもいい）。でも、死んだら帰ってきて欲しい（こちらのお墓に入ってくれ）という。では、門中は解体していないと仮定して、他に何がお墓の増加の要因になっているのか、以下で3つの仮説を検証していく。

2, 4 お墓の数の増加要因

① ユンヂチ

沖縄の年中行事には、今でも太陰暦が用いられている。太陰暦では1年が約354日と太陽暦より約11日短いため、月と季節がずれるのを防ぐために、約19年に7回のうるう年を設けて調整する。そのうるう年のことをユンヂチという。ユンヂチの年には同じ月が2回あり、その内のひと月は付け足して、あの世のご先祖様からこの世へは目が届かない月とされている。その間にお墓の建立や仏壇の移動をするのが適当と考えられているのである。沖縄の新聞には告別式広告が常に2ページくらいあるのだが、その隣には必ずお墓の広告がある。Web版歩く沖縄によれば、このユンヂチの頃になると「今年はユンヂチです。お墓の建立には最適な年です」といった広告が出る。そして年末になると「もうすぐユンヂチが終わります」といったように、お墓関連商品の購入を促す広告がページを賑わすという。前述した崎原石材の方のお話では、だいたい4年に1度はお墓の受注が多いそうで、ユンヂチの影響ではないかとおっしゃっていた。仮墓から新しいお墓への移動も、これを契機にすることも多いのではないかと考える。沖縄では、お墓の築造に風水が非常に重要であることは前述した。たとえば、風水で判断されたお墓の築造に適した場所、日程が現時点から時間があいてしまい、すぐにお墓を築造することができない場合、死者を仮墓に葬ることがある。その他金銭的な関係ですぐにお墓を築造できない場合も同様である。

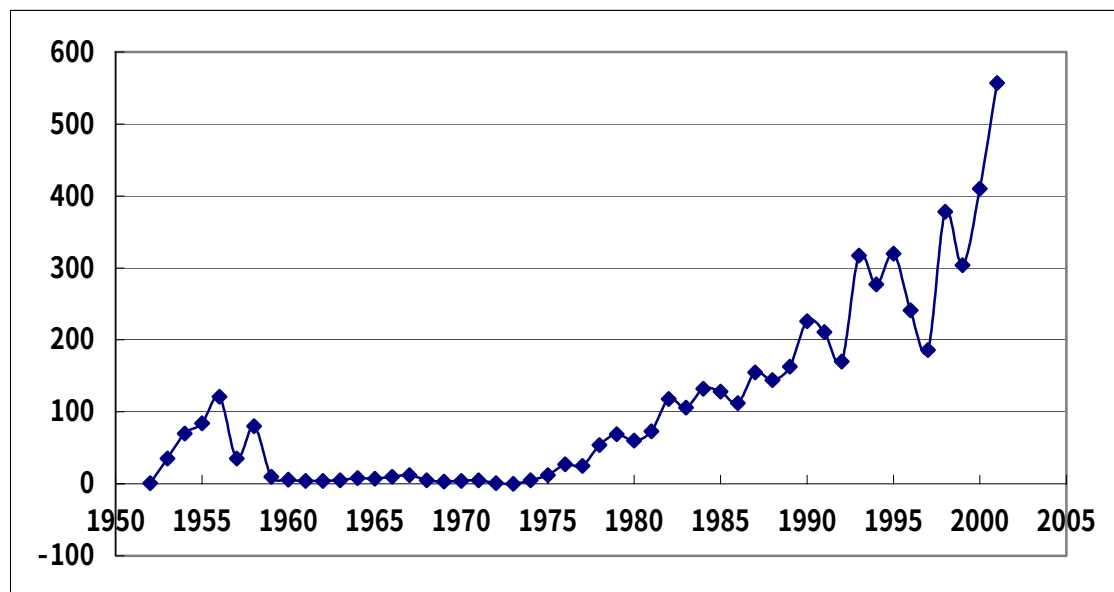


図2 沖縄県における墓地の数の変化

出展：沖縄県庁業務衛生課田盛さん提供，沖縄県墓地経営主体別許可件数をもとに作成
上記の図は，市町村，財団法人，宗教法人，個人，その他の墓地の築造許可申請に対して沖縄県庁が許可したお墓の築造件数をグラフにしたものである．1975年以降増減を繰り返しながらも，全体的には増加している．この数字の上下はユニヂチによるものとも考えることもできるのではないかな．

余談になるが，このグラフにおけるお墓の総数は28,994基であるが，沖縄県庁業務衛生課の田盛さんによれば，沖縄では無許可でお墓を築造する方が非常に多いという．よって，この数字がお墓の実数を表しているわけではないことを付け加えておく．前述の奈良沖縄県人会の喜納さんにこの話をしたところ，お墓の築造に申請が必要なことを存じられなかった．この発言が一般の方々の認識をよく表しているのではないだろうか．

②沖縄の本土返還に際しての特別措置

奈良沖縄県人会の喜納さんによれば本土復帰前後，海沿いにあったお墓がどんどんなくなっていったという．誰かが最初にお墓を移動させると，最後に残されると（お墓の祖先が）かわいそうだといって，最終的にすべてのお墓が新しい墓地へ移動していった．そしてこの頃は墓地だけでなく，道路の舗装や家の建設など大規模な建設ラッシュが起こっていたという．その背景には，本土返還に際する特別措置が関係しているのではないかと考える．

「日本政府は沖縄が返還される以前から沖縄に対する経済援助を行なっていたが、日本返還が確定すると政府は積極的に沖縄の産業開発を推進することを決定し、そのための経済援助の一環として、国が琉球政府に長期資金を貸付ける際の細目をその内容とする『沖縄地域における産業の振興開発等のための琉球政府に対する資金の貸付に関する特別措置法』（1968年5月21日、法律第60号）を制定した」という（南方同胞援護会 1972: 102）。この法律は1968年7月1日から施行された。これ以外にも様々な特別措置が行なわれたが、南方同胞援護会（1972）によれば、この法律は、国が琉球政府に長期資金を貸し付けることによって、この地域における産業の振興開発およびその住民の福祉の向上に寄与することを目的としている。この法律の貸付の対象は9つあるが、中でも特に市民生活に関係するものに、「六、住宅の建設に必要な資金」がある。これを期に琉球政府から貸付を得られた市民は家の建設だけでなく、新たなお墓の築造も行なったのではないだろうか。また、様々な振興開発計画によって、開発され始めた海沿いからの立ち退きを要求されたことも考えられる。かつては海や山の中にあったお墓が、この頃を境に移動を余儀なくされていたのだろう。

③人口の増加

沖縄は全国でも有数の人口の増加している県である。県外からの転入者数も、2000年は24,495人と、1999年よりも827人減少したものの、近年は転入者数が転出者数を上回っている。

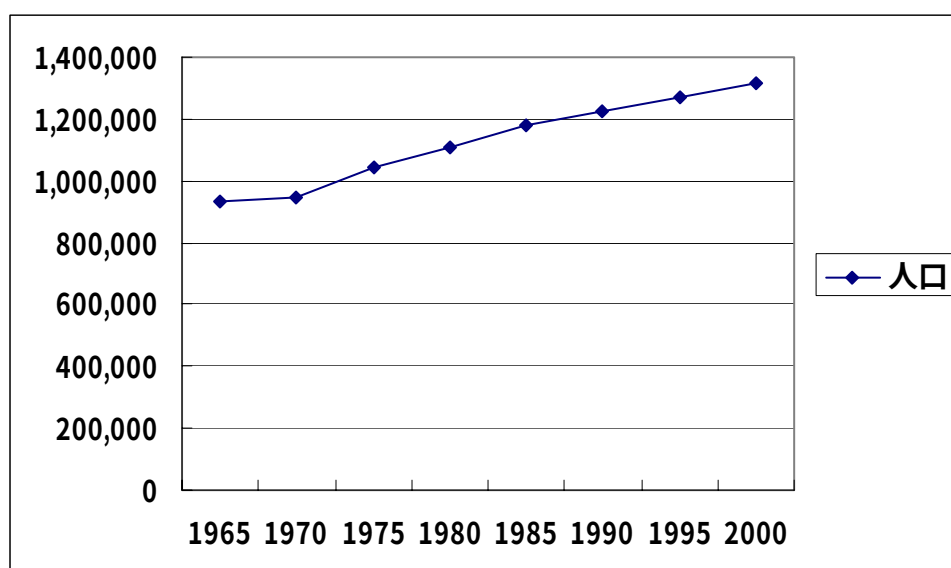


図3 沖縄の人口の変化

出展：国勢調査（2000）をもとに作成

上記の図 3 によれば 2000 年時点で沖縄の人口は 1,318,220 人である。仕事や学生で移り住む人や、近年沖縄に惹かれて移り住む人の増加もこの数字に表れているのだろう。しかし、この人口の増加の大きな要因は、沖縄の出生率の高さが大きく関係しているのではないだろうか。

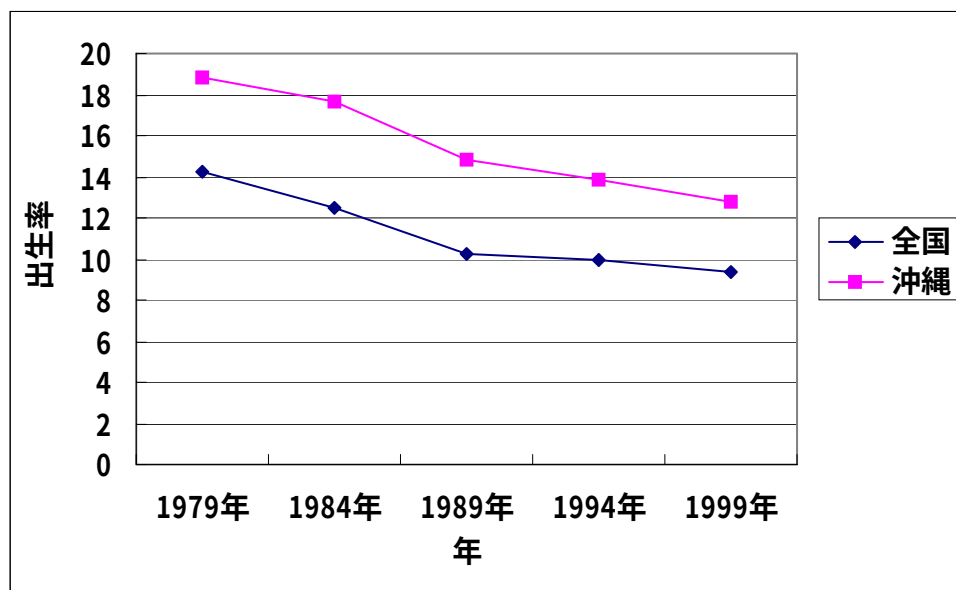


図 4 全国と沖縄の出生率の比較

出展：出生に関する統計人口動態統計特殊報告（2002）をもとに作成

年々低下しているものの、沖縄の出生率は全国平均と比べて非常に高い数字になっていることが、上記の図 4 ではっきりと表されている。厚生労働白書（1995）によれば、1995 年時点での沖縄の合計特殊出生率は 2.41 であり、人口の自然増加率は全国一である。日本一の長寿県であり、この少子化時代に女性が平均 2 人以上の子供を生むというのは、人口増加のまぎれもない要因である。

2, 5 三つの要因の検証

ここまでお墓の数の増加要因を、3 つの仮説をたてて検証してきたが、改めて検証するとこの中で最も大きな要因は人口の増加ではないかと考える。以下その根拠となる点を述べていきたい。

まず、第 1 要因のユンヂチであるが、確かに約 19 年に 7 回のうるう年が設けられ、それを契機にお墓の需要が高まるかもしれない。しかし、沖縄県統計年鑑（2000）によれば、

沖縄では年間 7880 人の方が死亡している。この数字のすべての人々が沖縄の墓地に入るわけではないにしろ、何千という単位がしばらくお墓に入らないとは考えがたい。また既存のお墓に入る方ばかりでなく、この人口の増加を反映して新たなお墓が増えるのは当然である。

第 2 要因である沖縄の本土返還に際しての特別措置であるが、これは実際に海や山が開発されて昔からあったお墓が立ち退いたとしても、移転先に新たな墓地を築造することから、そのお墓の実数は変わらない。

以上の点をもって、上記の 2 つをお墓の増加の主要な要因とは考えがたい。人口に関していえば、門中墓のように入る成員があらかじめ決められているお墓は以前から存在し、その数は昔も今も状況は変わらない。だが、家を出た人間の家族墓は、昔と比べれば出生率は減少しているものの、人が生まれるごとに増えるものだからである。それが今まで何世代も続き、現在にいたっている。よって、人口の増加がお墓の数の増加要因だと考える。

3 結論

お墓の数の増加要因は人口の増加であるが、そこには興味深い事情が二つある。人口増加の内訳は、図 1 で示した単独世帯の増加と核家族世帯の増加であり、これは本土にも見受けられる近代社会の普遍的な要因である。もう一つは、出生率が全国一という沖縄の特殊な要因がある。図 5 から乳児死亡率は低下しているが、沖縄は出生率が依然として高い。このことから、沖縄は未だに多産少子が続く地域であるといえるのだ。

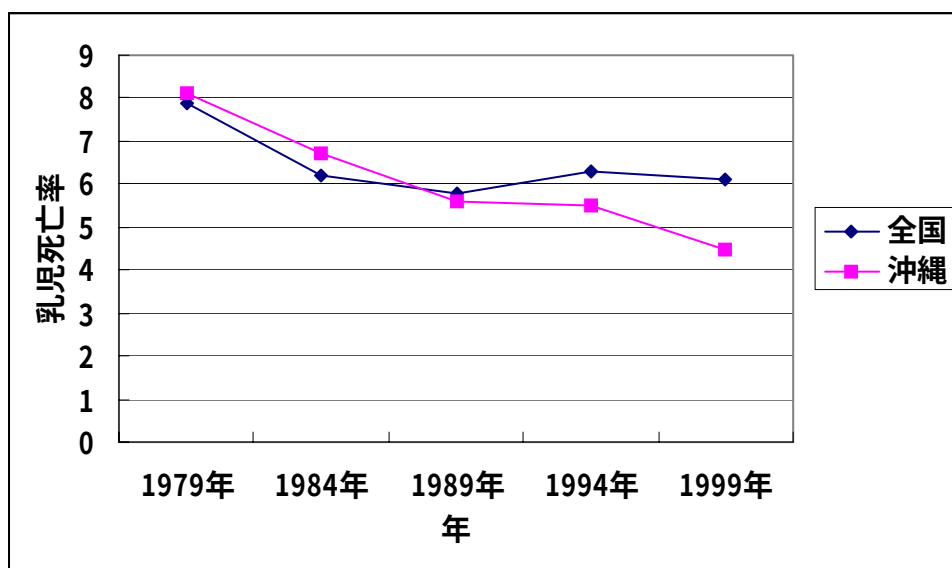


図 5 全国と沖縄の乳児死亡率の比較

出展：沖縄県統計年鑑（2000）をもとに作成

出生率は低下しているとはいえ、これからも人口の増加は続いていくと考えられる。沖縄は今も開発が進む。そのたびに山が切り開かれ、昔からあったお墓が立ち退いていく。そしてまた、そのお墓のために山が切り開かれる、ということが繰り返されてきたのを見てとれる。お墓に入るのではなく、散骨や、または宇宙へ灰を打ち上げるというような葬送の自由を推進する運動が近年活発化しているが、この現状ではお墓がいっぱいになる方が先であろう。特にベビーブーム世代が高齢化しているため、これからもどんどんお墓は増加していく。戦後本島では洗骨習慣がなくなり、すべて火葬になったため、今日流行している家形墓のような小ぶりのお墓が築造されるようになった。しかし、これ以上お墓を小さくすると塔式墓になるが、これはまだ沖縄の人々にはあまり受け入れられていないようである。沖縄で出会った女性は塔式墓のことを、あれは本土から来た人が建てているお墓で、こちらの人は建てないとおっしゃっていた。しかし、これから何世代も経て沖縄が墓地不足になった時には、この塔式墓が受け入れられる日が来るのかもしれない。

4 終わりに

沖縄というところは、本土とはまた文化的にも大きく異なる場所である。それゆえ私を含め、国内外の多くの人々を魅了してやまない場所である。その独特の文化ゆえに研究対象が豊富であるが、私のように沖縄に何の縁もゆかりもない人間にとっては手探りの研究になった。この研究の出発というのは、2001年夏に与那国島を訪れた際に見た亀甲墓である。海の目の前にそびえ立つ何百というお墓は、私が日本にいることを、現実の世界にすることすら忘れさせた。その時の私は、もしもこの場所が物語の中であると言われてもおそらく信じたことだろう。曇り空の下、誰一人おらず、いるのはお墓に繋がれた与那国馬だけ。荒波のしぶきがかかるあの基地は、それだけ衝撃的であった。その後卒業論文のテーマに沖縄のお墓の形を選んだのだが、近くに沖縄の専門家もおらず、集められる沖縄関連資料は東京の財団法人沖縄協会にも足を運んで調べた。そして臨んだ現地調査であるが、4泊5日の日程で行ったものの、文化人類学的なアプローチをするなら住み込みで調査をしなければいけないということに気が付き、落ち込んだ。だが、せっかく来たからには何かをつかんで帰らなくてはと思い直し、本島のお墓の数に圧倒されたことから実際にいくつもの基地に足を運んでその傾向をとらえた。こちらに戻ってしばらくは、沖縄に行ったものの向こうで調べたことは何の役にも立たなかったのではないかと悩んだ。しかし、このよ

うに視点を変え、何とか卒業論文にまとめることができた。

沖縄は先ほども述べたように独特の文化を擁している。そしてその歴史も特異なものである。今年で本土に復帰して30年である。復帰してもっと長い時間が経っているように感じられるが、まだ30年である。ここまでで述べた門中制も今はまだ継続しているが、これからは時代の流れとともに、緩やかに解体していくのであろう。奈良沖縄協会の喜納さんは、自分の子供たちには好きな場所にお墓を建てればいいと伝えているそうだ。もうあなたたちの時代なのだからと。前述した本土で働く門中の長男の男性は、もし自分が本土で亡くなればしばらくお寺に骨を預けておいて、母親が亡くなってからこちらにお墓を建てようか、という話を家族としているという。しかし、家形墓の流行はしばらく続きそうだ。浦添市にある墓地群にキリスト教会の墓地があったのだが、そこのお墓のほとんどが家形墓であった。その時これは沖縄の文化だなと強く感じた。とはいうものの、これから開発もいっそう進み、景観も変わっていくのだと思われる。沖縄の生活様式も本土の文化に侵食されつつある。沖縄独自のものは守りながらも、まだまだこれからも変化が起こるのではないだろうか。

2001年の夏までは沖縄に行ったこともなく、一切接点もなかった。しかし、これをきっかけに今まで知らなかったこと、そのまま生きていたならきっと知らないで過ごしていたことなど、非常に貴重な経験をすることができた。旅先で墓地に行く機会や、町役場、図書館を訪れる機会はあまりないことだろう。

このように大きなものを卒業論文のテーマにまで選んでしまったが、最終的に仮説の域を出ない部分もあったことを残念に思う。最終的な証明はいずれ後進の研究によって明らかにされることを期待する。これからは学問を離れたところから沖縄に注目していこうと思う。

文献

Hirayama, 2001 「web 版歩く沖縄」

<http://www.namcle.com/1st/todayokinawa09.htm>, 2002. 12. 18.

新崎盛暉・大橋薫, 1989, 『戦後沖縄の社会変動と家族問題』アテネ書房。

窪徳忠先生沖縄調査二十年記念論文集刊行委員会, 1988, 『沖縄の宗教と民俗』第一書房。

厚生省, 1995, 『厚生白書』

厚生労働省大臣官房統計情報部編，2002，『出生に関する統計人口動態統計特殊報告』厚生統計協会.

名嘉真宜勝，1999，『沖縄の人生儀礼と墓』沖縄文化社.

仲松弥秀，1993，『うるまの島の古層』梶社.

沖縄県企画開発部統計課，2000，『沖縄県統計年鑑』.

渡邊欣雄，1985，『沖縄の社会組織と世界観』新泉社.

頁設定

一頁あたり 40 字×30 行

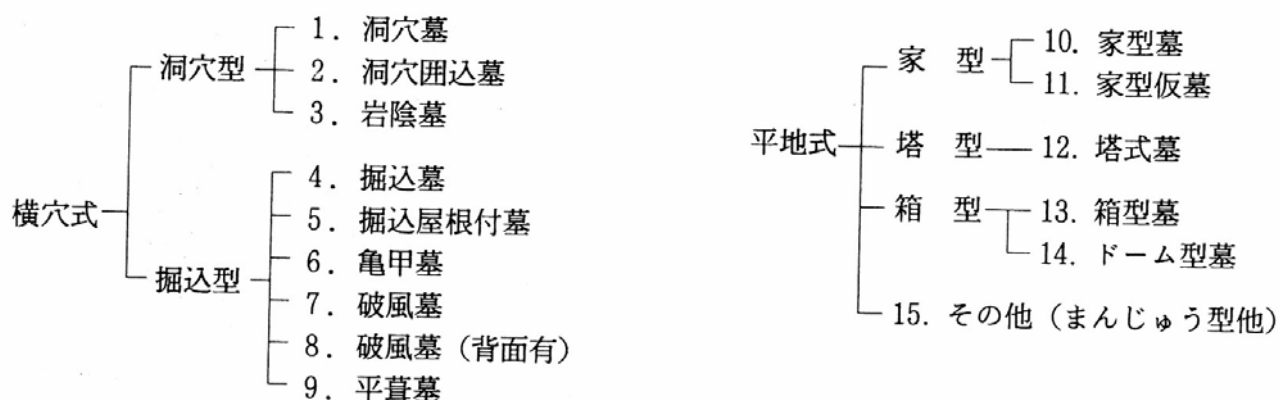
総頁数 19 ページ

原稿用紙 50 枚

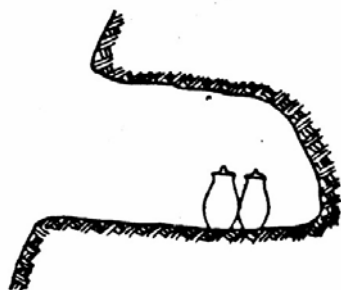


3. 形式の分類

ア. 外形による分類



・洞穴型は基本的に自然の洞穴を利用した横穴墓を指し、掘込型は人工的なものをいう。



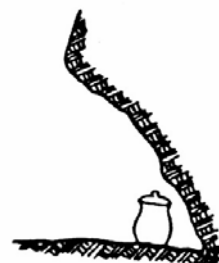
1. 洞穴墓

自然の洞穴を利用。



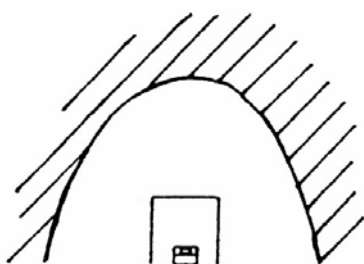
2. 洞穴囲込墓

洞穴の入口を石等で閉じた墓。



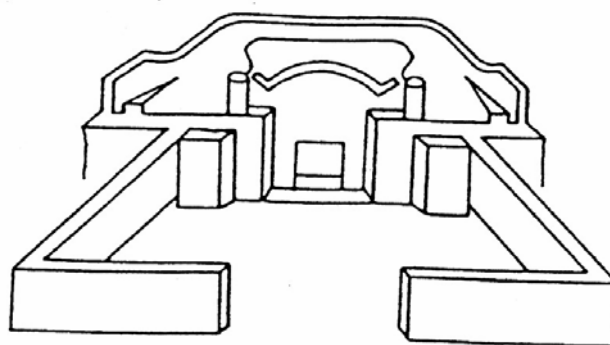
3. 岩陰墓

傾斜した岩のかげの部分を利用。ごく浅い洞穴もこれに加えた。



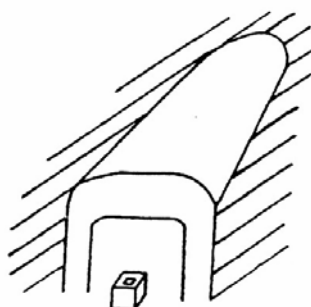
4. 掘込墓

丘や斜面を掘り込んだ墓。前面は石積みや漆喰等で閉じられている。一時的な個人墓のように小型のものから共同墓として使用されている大型のものまである。



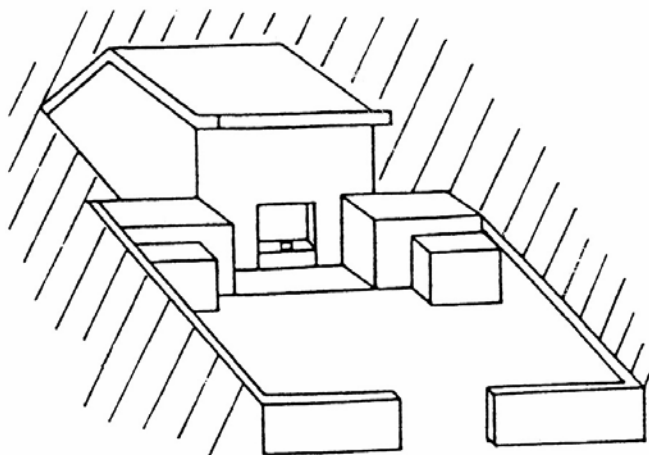
6. 亀甲墓

名護市域では明治以降造られたものが多い。



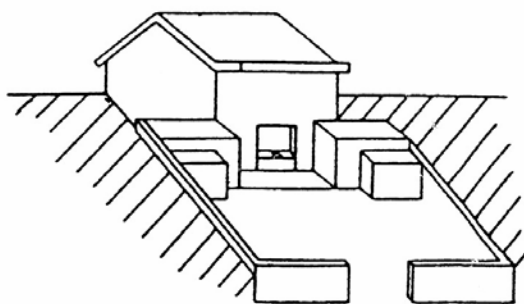
5. 掘込屋根付墓

丘や山の斜面を掘り込み、簡単な屋根を付けた形。



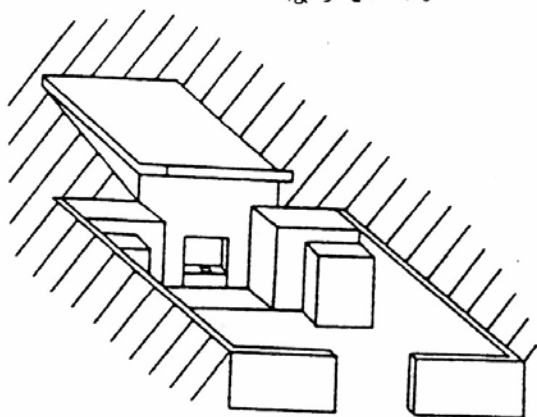
7. 破風墓

掘込墓であるが、
屋根が破風型に
なっている。



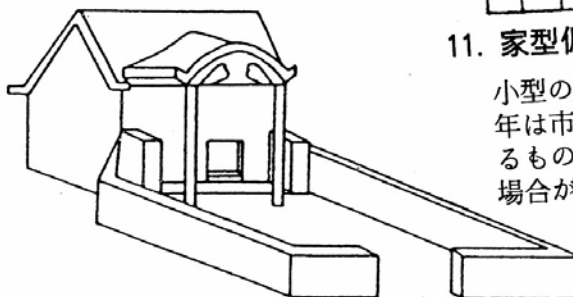
8. 破風墓 (背面有)

丘や山裾から破風
墓が前面にせりだ
した形。



9. 平葺墓

屋根が斜面状に
なっている。



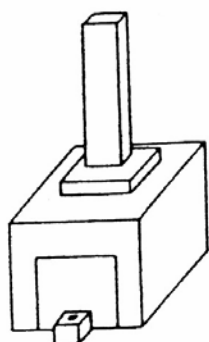
10. 家型墓

(平地式破風墓)
最近造られる墓
の多くがこの形
である。



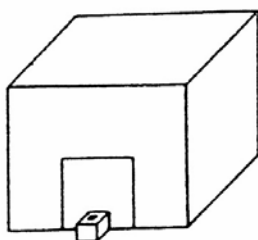
11. 家型仮墓

小型の簡易墓。近
年は市販されてい
るものを利用する
場合が多い。



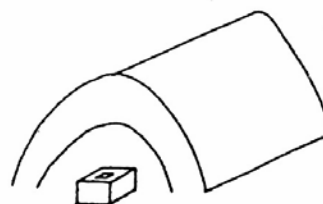
12. 塔式墓

箱型墓の上に石
塔を建てたもの。
戦死者の墓に多
くみられる。



13. 箱型墓

簡単なブロック
積みのもが多い。
仮墓として多く
利用される。



14. ドーム型墓

石やテーブルサ
ングを利用し、
積んだ上から漆
喰やセメントを
塗布している。

図1 外形分類

(『那覇市歴史地図』参考)